法の水茎 (77)

大正大学講師　髙橋秀城

さまざまに
錦ありける
深山かな
花見し峰を
時雨染めつつ

（西行『山家集』）

（色とりどりに錦織りなす、お山だなあ。春は桜の花を見た峰々を、秋の時雨が染めているよ）

「紅葉」という呼び方は、絹を紅で染色した薄手の絹織物「紅絹」から名付けられたとも言われています。「紅絹」は、鬱金で黄色に下染めした上に紅をかけて、揉むことによって紅葉色に染め上げるそうです。赤や黄に色づく木の葉は、冷たく降りかかる時雨が染めなしたものでしょうか。春は桜を愛でた薄紅色のお山も、今は艶やかな緋色に変わっています。

時雨ゆく

片野の原の
紅葉狩
頼むかげなく
吹く嵐かな

（『夫木抄』源俊頼）

（時雨が降り過ぎる片野の原に紅葉狩に出かけてみると、頼みとする物陰もなく、嵐が吹き荒んでいることよ）

秋の野山を散策して、紅葉の美しさを観賞することを「紅葉狩」と言います。「紅葉狩」は、古く『万葉集』に見え、江戸時代からは民間にも広まっていきました。

この「時雨ゆく」の歌では、「一雨ごとに色濃くなった紅葉が、激しい嵐に散り急いでいる様子が詠われています。「時雨」は「晩秋から初冬にかけて降ったり止んだりする小雨」ですが、そこから比喩的に「涙ぐむ」という意味にも使われます。この歌には、「紅葉狩」で踏みしめた「落葉」と、過ぎゆく秋を惜しむ「落涙」とが重ね合わされているように感じます。

ちなみに、春の梅や桜のお花見、秋の紅葉狩や茸狩などの行楽に出かけることを「遊山」と言います。今では「気晴らしの外出」程度に使われる言葉ですが、もともとは禅宗で用いられる仏教語で、「晴れ晴れとした心境で、山水の見事な景観を楽しみ過ごす」という教えでもあります。物静かで奥深い秋の錦に抱かれれば、自然と清らかな心持ちになっているでしょう。

秋の景色をめぐっては、次のような話があります。

今は昔。藤原惟規という男がいました。遠く離れた父親に会いに行くために、京の都から越後国に向かっていましたが、旅の途中で病にかかり、国に着いた時には危篤状態に陥ってしまいました。

息子に会える日を楽しみに待っていた父は、このような変わり果てた姿での再会に嘆き悲しみます。あらゆる手を尽くして看病しましたが一向に治りません。

どうしようもなくなった父は、「もうこの世のことを思っても仕方ない。来世を念じよう」と、お経を唱えてもらうために、智恵のある高僧を枕元に呼びました。

僧侶は、男の耳元で囁きました。「地獄の苦しみが目前に迫ってきたぞ。死ねば中有（次の生を受けるまでの間）と言って、遥かな広野をただ一人で歩まねばならない。その心細さ、耐えがたさを想像するが良い」と。

すると男は、息も絶え絶えに尋ねます。「その中有の旅路では、嵐に散る紅葉や、風になびくススキの花のもとで鳴く松虫などの声は聞こえないのでしょうか」と。これを聞いた僧は声を荒げ、「何のためにそのようなことを聞くのだ」と言うと、男は「もしそうなら、それらを見ながら心を慰めようと思いまして」と、とぎれとぎれに話すので、僧は「まったく気が狂っている」と言って、逃げ去ってしまいました。

（『今昔物語集』）

男が語った秋景色に、なぜ僧は呆れ、立ち去ってしまったのでしょうか。その理由は語られていませんが、僧は、あえて地獄の苦や、死出の旅路の寂しさを伝えることによって、男にこの世に再び立ち返ってほしいと願ったのでしょう。父親もそれを期待して、僧に最後の望みを託したのかもしれません。

男はこの世で秋の風情に感動していました。それはそれで素晴らしいのですが、そこに「飛花落葉」を感じることは無かったようです。「飛花落葉」は「春の花もやがて散り、青葉も秋になれば色が変わって散る」ように「儚い世の中」を表す言葉です。これまで幾度となく「無常の道理」を感じる縁があったにもかかわらず、男は見た目の美しさ、表面的な雅びさにのみとらわれて、本質的なものを理解してはいなかったのでしょう。僧はそれを瞬時に見抜いたが故に退出したのかもしれません。

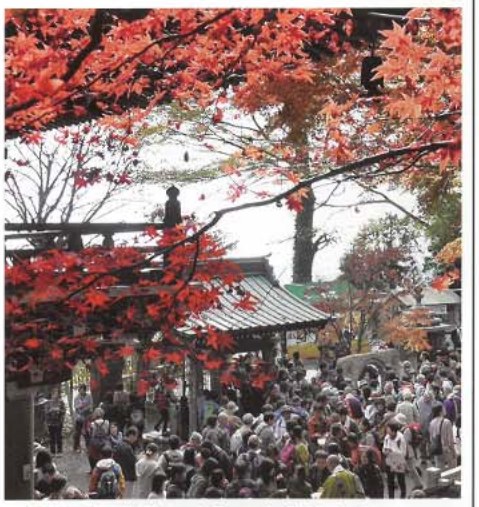
昨日と思へば
今日に過ぎ、
春と思へば
秋になり、
花と思へば紅葉に
移ろふさまなどは、
飛花落葉の観念も
なからんや

（二条良基『筑波問答』）

（昨日と思えば今日に過ぎゆき、春と思っているといつの間にか秋になり、桜を思えば紅葉に変わっている様子などは、「飛花落葉」の教えを心静かに観察することになるのでしょう）

人の気立てや思い遣りを「心葉」と呼びます。瑞々しい新芽が若葉となり、青葉を経てやがて黄色や紅色に深まるように、「心の葉っぱ」も、四季折々に美しく光り輝きたいと思います。

（栃木北部教区普濟寺）



紅葉狩に大勢の人が訪れる

折り折りの記 (111)

髙尾路の厚板椅子に露の玉

波多野　重雄

髙尾山の一号路を登った道辺に、青年二人が厚い木の椅子に光る朝露を拭き休憩して居た。私も側に腰掛け、ふと若き日に業界視察で米国に研修の帰途、ナイヤガラの瀧を見ながら故友K君と記念写真を撮った想ひ出が甦った。

露は万葉の昔から和歌や俳句に詠まれてきた。西行も「露もらぬ窟も袖は濡れけりと聞かずばいかに怪しからまし」と又、結婚は五十歳の一茶が夭折の子を「露の世は露の世ながらさりながら」の句を残している。人の死は露の如くはかなき極みである。

（髙尾山健康登山の会々長）

百観音霊場巡礼 (25)

厚木市　荒井　一雄

冬遊獨鈷山
郊游師童登段行
紅顔参詣観音堂
碧空紅雲悠悠流
夕陽冷沈故郷方

冬、獨鈷山（西明寺）に遊ぶ

郊游（遠足）の教師・児童らは、石段を登るの行…
紅顔（少年・少女）らは参詣す、観音堂を…
碧き空に紅き雲は悠々と流れ、夕陽は冷やかに沈む、故郷の方角に…

中興俊源大徳忌法要厳修

十月四日